

時間と現在

星 野 徹

時間と現在

星 野 徹*

20世紀の初めに、マクタガート (McTaggart, 1908, 1927) が時間の非存在を証明する議論を提出して以来、マクタガートが提起した問題群が哲学的時間論の中心を占め続けてきたと言ってよいだろう。本稿では、マクタガートの証明は失敗していること、それにもかかわらず、マクタガートが考えていたのは別の理由によって、過去、現在、未来は実在しないこと、したがって、時が流れるという比喩は適切ではないこと、以上のことを示すことにする。

I マクタガートの証明

マクタガートによれば、出来事の時間的位置を表すには二つのやり方があるという。ひとつは出来事の前後関係に訴えるやり方である。たとえば、関が原の戦いは明治維新より前であり、大化の改新よりも後である。こうした出来事間の前後関係は不変である。関が原の戦いが明治維新より前であるならば、それはいつの時点においてもそうである。西暦2008年においても、西暦3000年においても、関が原の戦いが明治維新より前であることには変わりがない。もうひとつは、過去、現在、未来という述語によって位置を表示するやり方である。バブル景気は過去のことであり、現在はアメリカ発の不況の真っ只中であり、景気の回復は未来のことであり、後者によって表されるとき、出来事の時間的位置は刻々と変化する。北京オリンピックはかつ

ては未来のことであったが、やがて現在になり、そして過去のこととなる。ロンドンオリンピックは未来のことであるが、しばらくすると現在となり、ついで過去のこととなるだろう。マクタガートに倣って、前後関係によって規定される系列をB系列、過去、現在、未来によって規定される系列をA系列と呼ぶことにしよう。

マクタガートは、時間にとってはA系列がより基本的であると考える。マクタガートによれば、変化なしに時間はありえないのであり、変化とは、出来事が未来から現在、過去と、A系列上の位置を変えること以外ではありえないからである。ところがA系列は矛盾を含む。矛盾するものは存在することができない。よって時間は存在しない。これがマクタガートによる時間の非存在の証明のアウトラインである¹。

A系列が矛盾を含むとは以下のようなことである。過去であることと現在であることと未来であることは両立することができない。ある出来事が過去のことでありと同時に現在のことであり、かつ未来のことであり、などということはいずれもない。ところが、あらゆる出来事は、未来であり、現在であり、過去であるという三つの特性を必ず持たなければならない。たとえば、北京オリンピックは、2004年においては未来であり、2008年においては現在であり、2012年においては過去である、というように。したがってA系列は矛盾を含んでいるのであり、過去、現在、未来は存在せず、時が流れるということが、出来事が未来から現在へやってきて、やがて過去へ遠ざかって行くということであるとすれば、時の流れというものも存在しないこ

* ほしの・とおる
埼玉大学教養学部教授、哲学

とになる。

これに対して、次のように反論したくなるだろう。出来事が過去であり現在であり未来であると言っても、それは同時にそうであるわけではなく、継起的にそうなのである。そのことは、矛盾の表現において前提されていたことである。北京オリンピックは同時に過去、現在、未来であると言いたいわけではないだろう。ある出来事Eが現在生じているとすれば、それが未来であるのは過去においてのことであり、それが過去であるのは未来においてのことである。だから、どの時点においても矛盾など生じてはいない。

これに対してマクタガートは次のような再反論を用意している。「Eは過去である」を、「Eは未来において過去である」、「Eは現在である」を「Eは現在において現在である」、「Eは未来である」を、「Eは過去において未来である」、と書き換えることによって、確かに最初の矛盾は解消されるが、同じ矛盾が新たに導入された「過去」、「現在」、「未来」において出現する。「Eは未来において過去である」と言うときの未来の時点も、過去であり、かつ、現在でありうるものでなければならないからである。「現在」「過去」についても同様である。この新たな矛盾を、「未来において過去である」と言うときの未来の時点が過去でもあるとは、「更なる未来における過去において過去である」ということなのである、と言い換えることによって解消することができるが、そうしたところで、新たに導入された更なる未来の時点も、過去であり、また現在でありうるものでなければならない、みたび矛盾が出現することになる。このようにして出現する無限後退は、マクタガートによれば悪しき無限後退である。矛盾を解消するために導入された述語が矛盾を含むならば、当初の矛盾は解消されたことにはならない。何度新たな表現

を導入しても同じことである。

こうして、マクタガートによるA系列は矛盾を含むという証明を受け入れながらも、時間の存在を認める者は、時間はA系列的ではなくB系列的であると考えることになる²。一方、過去、現在、未来という特性は実在すると考える者は、マクタガートの提起したパラドクスを解決しなければならないことになるだろう。

ここで、過去、現在、未来の代わりに、昨日、今日、明日を使ってマクタガートの議論を再構成してみよう。昨日、今日、明日は、過去、現在、未来と同じA述語である。あらゆる日は、明日であり、今日であり、また昨日である。たとえば、今日は12日であるが、11日においては12日は明日であり、13日においては昨日である。12日は明日から今日になり、やがて昨日になるのであり、今日が日付の上を移動して行くのである。

昨日、今日、明日は、過去、現在、未来に比べて機動的であり、任意の日を基点にA系列上の正確な時点を表すことができる。たとえば、おとといを昨日の昨日、あさつてを明日の明日と表すことができる。さらに、日付どうしの関係を、昨日、今日、明日を使って正確に表現することができる。12日は、昨日(11日)においては明日であり、おととい(10日)においてはあさつてであるが、それを、「12日は、昨日の明日であり、昨日の昨日の明日の明日である」と表現することができる。また、昨日(11日)は、昨日の昨日(10日)の明日であり、明日(13日)の昨日の昨日である。こうした表記法を導入することによって、無用な混乱を避けることができるようになるだろう。すると、マクタガートと反マクタガートの論争は次のよう展開をたどることになるだろう

——昨日であること、今日であること、明日であることは、両立不可能な特性である。いか

なる日も、同時に昨日であり、今日であり、また明日でもあるということはない。しかしまた、いかなる日も昨日であり、今日であり、また明日である。こうして、昨日、今日、明日という特性は矛盾を含む。故に、今日であるような日は存在しないし、昨日も明日も存在しない。

——今日は12日である。今日が12日であるならば、12日が昨日であるとは、正確には、明日の昨日であるということであり、明日であるとは、昨日の明日であるということである。12日は、明日の昨日であり、今日の今日であり、昨日の明日なのである。

——新たに導入された昨日、今日、明日は、それぞれ、昨日でも今日でも明日でもなければならぬのであるから、矛盾は解消されていない。

——マクタガートは、12日は明日の昨日であるだけでなく、昨日の昨日でもあり、今日の昨日でもあると言う。しかし、12日が昨日の昨日であるのはあさってにおいてのことであり、今日の昨日であるのは明日においてのことである。正確には、12日は今日の明日の昨日であり、明日の明日の昨日の昨日であり、明日の今日の昨日であると言うべきなのである。また、12日が昨日の今日であり、今日の今日であり、明日の今日であるとは、正確には、明日の昨日の今日であり、今日の今日の今日であり、昨日の明日の今日であるということであり、12日が昨日の明日であり、今日の明日であり、明日の明日であるとは、正確には、今日の昨日の明日であり、昨日の今日の明日であり、昨日の昨日の明日の明日であるということである。こうして矛盾は解消される。

この応酬は無限に続くだろうか。仮に世界が10日に始まって14日に終末を迎えたとしよう。世界が5日しか持続しないとすれば、論争はここで打ち止めである。世界は昨日の昨日始

まり、明日の明日に終わるからであり、したがって、12日が昨日の昨日の昨日であったり、明日の明日の明日であったりすることはないからである。マクタガートが考える無限後退が生じるのは、過去から未来にわたり無限に存続する世界においてのことである。それでは、5日間の世界において矛盾が生じるかといえば、反マクタガート側が言うように、矛盾などは存在していない。12日は、昨日の昨日の明日の明日であり、今日の昨日の明日であり(すなわち昨日の明日であり)、昨日の今日の明日であり(昨日の明日であり)、昨日の明日の今日であり(昨日の明日であり)、今日の今日の今日であり(今日であり)、明日の昨日の今日であり(明日の昨日であり)、明日の今日の昨日であり(明日の昨日であり)、今日の明日の昨日であり(明日の昨日であり)、明日の明日の昨日の昨日である。簡略化すれば、12日は、昨日の昨日の明日の明日であり、昨日の明日であり、今日であり、明日の昨日であり、明日の明日の昨日の昨日である。これらはすべて同一の日を指す、両立可能な特性である。

マクタガートは、時間が有限であるとしても、始まりの時間は現在と過去という矛盾した特性を持ち、終わりの時間は、未来と現在という矛盾した特性を持つだろうと言うが、これも誤解である。たとえば、10日が今日と昨日という両立不可能な特性を持つわけではない。10日が今日であるのは、おとといにおけることであり、昨日の昨日の今日であるということである。また、10日が昨日であるのは、昨日のことであり、10日が昨日であるとは、正確には昨日の昨日であるということであるからである。

5日間の世界において矛盾が生じないとすれば、6日間の世界においても、10億年の世界においても、さらに無限に続く世界においても矛盾は生じないだろう。そして、マクタガートの

言う無限後退も無害なものとなるだろう。12日は、同時に昨日、今日、明日であるわけではなく、明日の昨日であり、今日の今日であり、昨日の明日なのである、という最初の反論をマクタガートが暫定的に受け入れた段階で、その証明は無効となっているのである。それでは、マクタガートの議論は何を示しているのだろうか。

12日が昨日の昨日の明日の明日であり、昨日の明日であり、今日であるということは、明日の明日、すなわちあさってから、明日、そして今日へと、12日が日ごとに近づいてくるということであり、また、12日が今日であり、明日の昨日であり、明日の明日の昨日の昨日であるとは、今日から昨日へ、そしておとといへと12日が日ごとに遠ざかって行くということである。厳密に再構成されたマクタガートの議論は、出来事が未来から現在を経て過去へと遠ざかって行くさまを描き出すはずである。マクタガートの議論は、時間の非存在ではなく、時の流れを証明するものなのである。しかし、これで、A系列を時間の基本と考えるA論者とB系列を基本と考えるB論者の間の論争が一件落着するというわけではない。

II 移動する今

ここは東京である。ここが東京であるのは、東京がここ性という特性を持つからではなく、私が東京にいるからである。「ここ」は、発話が生じている場所を指すのであり、「ここは東京である」という言明が真であるのは、それが東京でなされた場合に限る。「今」の用法と「ここ」の用法のあいだに厳密な類比が成り立つならば、「ここ」と同じように、「今」も、そして、「過去」も「未来」も、世界そのものの特性ではなく、発話者の存在に依存する特性と見做すこと

ができるだろう。

「今」は、発話者が発話している時間点を指す。したがって、「今雨が降っている」という言明は、発話の時点で雨が降っているときに限って真である、と言われる。「ここ」と「今」は完全にパラレルであるように思われかもしれない。しかし、二つのあいだには微妙な違いがある。

地球は広大な宇宙空間に浮かぶ小さな天体に過ぎない。私は、東京という地球上の一地点に存在し、その地球は宇宙空間に包み込まれ、その無限の空間の一点を占めている。それならば、「ここ」は、私がいる地球上の一点を通り過ぎて、地球を包み込む宇宙空間の一点を指すこともできるはずではないだろうか。しかし、通常われわれは「ここ」をそのように使用することはない。今地球がいる空間領域にシリウスがいるという状況は想定可能であるにもかかわらず、「ここはシリウスでもありえた」という言い方はナンセンスに聞こえるだろう。「ここ」が空間点を指すことはない。「ここ」は地面にへばりついているのである。地面にへばりついた「ここ」と「今」が正確に対応するとすれば、「今」にできることは、発話と同時に生じている出来事を指すことだけである。ところが、われわれは、「今」は、出来事を飛び越えて、発話が生じている時間点を指すと思いつく。そのような時間点など知覚できないにもかかわらず、『今』は、発話者が発話している時間点を指す」という言い方の中にもそのことが示されている。

世界は、私が生まれる前にも存在していたし、私が死んだ後にも存続し続けることだろう。独我論者以外はそのように考えているだろう。それならば、私がいなくても世界においても、時間意識を持つものが出現する以前の世界においても、今という特別な時間点が存在してきたし、生命体が絶滅した後の世界においてもそれは存在し続けるのではないだろうか。それなら

ば、さらに、今の存在は、私の存在とも、時間意識を持ったものの存在とも独立しているはずである。こうして、出来事の上を移動する今というA理論的な時間表象が出来上がる。そして、ある出来事が今生じているということは、私の存在にも、時間意識を持ったものの存在にも依存しない、出来事そのものの特性であり、さらには、世界が出来事の総体であるとするれば、過去であったり、現在であったり、未来であったりすることは、世界の中に実在する特性であると見做されるのである。ここがシリウスでありえたということはナンセンスであるが、今が2000年でありえたということは意味があるかもしれないのである。

「今」が世界の特性であり、「今」が出来事の上を移動し続けるとすれば、世界を完全に記述しつくすことは不可能となるだろう。世界にこれまでに生じた、そしてこれから生じるであろう、すべての出来事を記述した年表があったとしても、どこが今であるかを書き込まなければそれは完成しない。しかし、今が出来事の上を移動しているのであれば、それに応じて年表の上の今を表す点も移動させなくてはならない。完全な世界年表が完成することは決してないのである。こうして、たとえば、ダメット(Dummett, 1960)は、マクタガートの議論は、時間が存在しないということではなく、実在についての完全な記述が存在しなければならないというわれわれの先入見は捨て去られなければならない、ということを示している、と言うのである。

しかし、本当に完全な世界年表は存在しないのだろうか。全知全能の神が世界年表をひとつ作るとすれば、その中には、確かに今という特別な時点は書き込まれていないだろう。世界年表はさまざまな者によってさまざまな時に読まれるだろうが、読むものの数だけの今をひとつの年表の中に書き込むことは神にもできないか

らである。また、われわれが、神の知性を覗き込むことができたとしても、どの時点が今であるかを知ることはできないだろう。神は世界を永遠の相の下に見るだろうからである。

神が作成した世界年表を私(T.H.)が読むことができたとしよう。その中にはT.H.の生涯も細大漏らさず書き込まれていることだろう。どこから始まるとも知れず、またどこまで続くかもわからないこの長大な世界年表を読破するには、無限の知性が必要とされるだろう。私が無限の知性を備えているとすれば、私はいずれT.H.の誕生の記述に出会うことだろう。あるいは、私は奇跡的な偶然によって、T.H.の記述にぶつかるのかもしれないし、私は意図的に、自分の生まれた年と場所に関する部分から読み始めるのかもしれない。そこには、T.H.に関するすべての事が書かれているのであるから、私とその記述を追って行くうちに、私は、T.H.が世界年表を読み始める場面に到達するだろう。さらに読み進めれば、私とその時に読んでいるちょうどその部分をT.H.が読んでいるという記述に遭遇するだろう。そこにはどのようなことが書かれているのだろうか。「T.H.はここを読む」と書かれているのだろうか。それとも、私が2009年1月1日にその部分を読むとすれば、年表の2009年1月1日の箇所、「T.H.は、世界年表の2009年1月1日の箇所を読む」と書かれているのだろうか。詳細は不明であるが、いずれにしても、私は、世界年表のT.H.に関する記述内容と、自分の行為が一致する場面に出会うだろう。そして、そこが今であると知るだろう。年表に、どこが今であるか記入されていなくとも、そこにすべての出来事が順序正しく記述されていれば、私はどこが今であるか知ることができるのである。私以外の人にとっても同じである。年表を読破する人は、誰でもどこが今であるかを知ることができる。年表にはどこが今であるか

は明示されてはいない。しかし、その中には読む者の数だけの今が含まれているのである。それならば、この世界年表は完璧と言えるのではないだろうか。

A理論とB理論の対立点を鮮明にするために、世界をできるだけ単純なモデルで表現してみよう。無限に続くテープがあると仮定しよう。テープ上には、整数が、ゼロを挟んで、負数から正数へ順序良く整列している。テープ全体は黒い紙で覆われているが、覆いには一箇所のぞき窓があって、その窓からはひとつの数字が顔を出している。覆いは、テープの上を小さな数から大きな数の方へゆっくり移動している。このようなテープ世界における唯一の変化は、窓からのぞく数字の変化である。そして、世界の状態をもって年号に代えることができる。2009が顔をのぞかせているならば、今は2009年なのである。

これは、時の流れを今という特別な時点の移動と捉える、スポットライト説の世界に似ているように見えるかもしれない³。しかし、二つは別物である。スポットライトが照らし出すのは、世界の中の存在物ではなく出来事であるからである。テープ世界では、2008が顔を出し、ついで2009が顔を出し、その次には2010が顔を出す。テープ世界がスポットライト世界でもあるとすれば、2008が顔を出すという出来事を照らしたスポットライトが、次に2009が顔を出すという出来事へと移動を続けるのである。テープ世界においては、どの時点をとっても、ひとつの数字が顔を出しているだろう。また、数字は定期的に替わって行くだろう。B論者にとってはそれがすべてであるが、A論者は、それに加えて、今という特別な時点があり、その時点が照らし出す出来事が今となるのだ、と言うわけである。2009が姿を現すという出来事の上に今

がいるならば今は2009年なのである。

今が出来事の上を移動するのならば、たとえば、いつ今は3000が顔を出すという出来事の上にいるのか、と問うことができるはずである。それに対する妥当な答えは、今から991年後、というものであるだろう。今から、991年後に、3000年が今になるというわけである。今から991年後は3000年であるということを、A理論は、今の時点が2009から3000へと移動するのに991年かかることによって説明しようとするのである。991年かけて、3000年が今になるのである。このように、いつ今か、という間に対しては、2009年という特定の時点を基準点とすることによってしか答えることができない。その意味で、A理論においても今は視点依存的である。

しかし、「今から991年後は3000年が今である」とは奇妙な言い方ではないだろうか。今から991年後に3000の数字が今現れるのではなく、単に、今から991年後に3000の数字が現れるのであり、今から991年後に今3000年になるのではなく、単に、今から991年後が3000年なのである。「今3000の数字が現れ」「今3000年になる」というときの「今」は、何の情報ももたらさない、無駄な表現である。それに991年かけて移動するのは、のぞき窓である。のぞき窓が991年かけて3000の上に到達するのと平行して、今が、窓が2009の上にいる時点から3000の上にいる時点へと移動するわけではないだろう。

現実世界に話を戻そう。今は2009年である。100年後には私は存在しないだろうし、1億年後には人類も存在しないだろう。それでも、100年後にも、1億年後にも世界は存続しているだろう。A論者は、私がいなく世界においても、さらに意識を持った存在がいなく世界においても、今という特定の時点が存在すると言う。それでは、いつが今なのだろうか。確かに、B.C. 100においてはB.C. 100年が今であったし、3000年に

においては3000年が今であるだろう。しかし、それは、B.C. 100年はB.C. 100年であり、3000年は3000年であると言うことに過ぎない。また、100年後には2109年が今であり、1億年後には100002009年が今であると言っても間違いではないが、それは、100年後は2109年であり、1億年後は100002009年であると言うことと同じことである。現実世界においても、やはり、今という特定の時点の存在を仮定することによって説明されることは何もないように思われる。

しかし、いつが今かという問に対しては、2009年という特定の時点に依存する仕方ではしか答えられないとしても、今が2009年であるということ、そして、今T.H.が時間について考えているということは、この世界についての厳然たる事実ではないだろうか。

確かに、私は今が2009年であると信じているし、私は今時間について考えていると信じている。したがって、T.H.が、「今2009年である」と信じ、「今時間について考えている」と信じているということは、世界についての事実である。しかし、それに加えて、今が2009年であるという事実や、今T.H.が時間について考えているという事実が存在するのだろうか。

この問題は次節で検討することとしよう。その前に、A理論とB理論の従来の定式化を修正しておきたい。

A理論は、過去、現在、未来を心の存在と独立の、世界に実在する特性と見做し、B理論は心の存在に依存する特性と見做すと言われてきたし、本稿でもそのような語り方をしてきた。しかし、これは、A理論とB理論の違いを正確に表現してはいない。なぜなら、独我論的A理論と独我論的B理論の対立というものも考えられるからである。

独我論者の意識は刻々と変化するだろうし、独我論者は時間意識も持つだろう。独我論者が

自分の死や自分の消滅という観念を抱くことができるかどうかは不明であるが、仮にそれらを抱くことができるとすれば、独我論者にとって、自分の消滅と世界の消滅は同じことであり、自分が消えてしまえば、それとともに時間も消えてしまうことは確かだろう。自分の消滅後も時間だけが経過し続けると考える者は純粹の独我論者ではないだろう。純粹の独我論者にとっては、時間も心的な表象なのである。

ところで、私は今時間についての論文を書いている。はるか昔に東京オリンピックの開会式をテレビで見っていたということを私はかすかに覚えているし、大学の卒業式の模様ならば、比較的鮮明に覚えている。私が独我論者ならば、目の前にあるように思われるパソコンは私の観念の中にあるに過ぎないと考えるだろう。また、東京オリンピックという出来事が実際に開催されていたわけではなく、また、過去の私の心に東京オリンピックの観念が生じ、それを今思い出しているというわけでもなく、東京オリンピックのおぼろげな像が今浮かんでいるだけである、と考えるかもしれない。そのように考えるならば、私は、現在主義的独我論者である。現在主義的独我論者にとって、現在の私の心に生じていることが世界のすべてである。一方、私は、東京オリンピックが外的世界において実際に開催されたとは思わないけれど、過去において東京オリンピックの像が私の心に現れたことは事実である、と考えるかもしれない。そして、現在思い出すことができること以外にも、私は過去においてさまざまな観念を持っていたのだ、と考えるかもしれない。このように、私の現在の想起能力とは独立に、私の過去の心的世界が存在しているということを受け入れるならば、私は實在論的独我論者である。そして、實在論的独我論者ならばB論者であることもできるだろう。

私の心にはさまざまな観念が去来してきたし、これからもそうであるだろう。さまざまな観念が継起的に出現すること、それが私の存在のすべてであり、世界のすべてである、と私がB理論的独我論者ならば考えるだろう。今私が時間についての論文を書いているということは、「今私が時間についての論文を書いている」という信念が私の心に生じると同時に、パソコンの観念や、身体運動の観念が生じているということなのである。それに対して、A理論的独我論者は、今パソコンの観念が私の心に生じ、今身体運動の観念が私の心に生じているということは、私の世界における厳然たる事実なのだ、と言うだろう。独我論者である私にとって、時間は私の表象に過ぎず、私と独立に存在するものではないとしても、私は、過去、現在、未来は、私の自己意識と独立に存在していると考えられることもできるし、また、どの心的出来事が今と見做されるかは、いつ私が時間についての意識を持つかということに依存すると考えることもできるのである。

Ⅲ 時の流れ

テープ世界においては、見える数字は定期的に入れ替わる。したがって変化は存在する。また、2000が現れているときから2009が現れているときまでのあいだは、2000が現れているときから2005が現れているときまでのあいだより長い。2000年から2009年までの時間間隔は、2000年から2005年までの時間間隔より長いのである。したがって、テープ世界においては、時間の経過というものも存在する。それではテープ世界では時は流れるだろうか。

時が流れるとはどのようなことなのだろうか。川が流れるとは、上流にあった水が、下流へ移

動するということである。水源から湧き出た水は、水源から絶えず遠ざかりつつあり、河口に絶えず近づきつつあるのである。それでは、時が流れると言うとき、何から何が遠ざかり、何が何に近づくのだろうか。

2009が見えているときから見れば、2000が見えているときは2005が見えているときよりも遠い。それでは、2000が見えているときは、2009が見えているときから遠ざかっているのだろうか。そうではないだろう。二つのあいだには9年の間隔があるだけである。2009の次には2010が現れるだろう。それでは、2009から2010に移る際に、何かから何か遠ざかったのだろうか。2000年から9年経過すると2009が姿を現し、さらに一年経つと2010が現れる。そのあいだ、2000が見えていたときが遠ざかりつつあったのだ、と考えたくなるだろう。では何から遠ざかりつつあったのだろうか。そのようなものは何もないのではないだろうか。2000年は、2009年から、2010年から、2009年6月からも遠ざかりはしないからである。

現実世界でも同じことある。東京オリンピックはるか昔のことである。東京オリンピックは遠くへ行ってしまったのだろうか、また東京オリンピックは遠ざかりつつあるのだろうか。東京オリンピックは、北京オリンピックからもロンドンオリンピックからも遠ざかってはいない。それでは私から遠ざかりつつあるのだろうか。しかし、私も東京オリンピックと同じような時間的存在である。そして、東京オリンピックも、東京オリンピックをテレビで見ている私の体験も、大学の卒業式のときの私からも、時間について考え始めたときの私からも遠ざかってはいない。それでは今の私から遠ざかっているのだろうか。今という特別な時点が存在するとすれば、それは、出来事の上を移動しているのだろう。今の私とは、刻々変化する私

の存在のどの部分のことなのだろうか。それはもちろん、こうして時間について考えている私である。しかし、時間について考えているときの私から東京オリンピックが遠ざかりつつあるわけではない。たとえば、この文を書いている私からも、この文を書くという私の行為が生じた時点からも、東京オリンピックは遠ざかってはいない。こうして、東京オリンピックが遠ざかりつつあるとすれば、それは、内容空疎な今の時点から遠ざかりつつあるのである。テーブル世界においても、2000が顔を出していた時点が何かから遠ざかりつつあるとすれば、それは、出来事の上を移動し続ける今の時点から以外ではありえないだろう。

時が流れることは時が経過することと同じではない。時が経過するためには、出来事が継起するだけで十分であるが、時が流れると言えるためには、出来事の継起に、今という特別な時点の移動が重ね合わせられなければならない⁴。出番を待つ出来事は今に近づきつつあり、出番を終えた出来事は今から遠ざかりつつあるのである。このような移動する今という想定は無益ではあるが、それ自体では無害である。マクタガートが考えたような矛盾を惹き起こすわけではないからである。しかし、移動する今は、誤った世界像を生み出し、擬似問題と呼び寄せる。

たとえば、われわれは次のように考える。世界ではさまざまな出来事が生起する。そして、私はそれらに今という一点で出会い続ける。あたかも、出来事の上を、私が今という時間軸を背負いながら歩いて行くかのように。しかし、これは誤った考えである。私がさまざまな出来事の上を歩いて行くのでもなければ、私の前をさまざまな出来事が通り過ぎるわけでもない。私は世界に属するのであり、私の生涯も世界で生起するエピソードのうちのひとつである。私は世界の一部であり、世界の他の事物と同様、

私も時間に浸された存在であるからである。また、スポットライト説によれば、一列に並んだ出来事の上を、今というスポットライトが順番に照らして行く。われわれは、スポットライト世界を想像するとき、自分がスポットライトに照らし出された出来事を見ているさまを想像する。あるいは、自らの視線をスポットライトの光線と重ね合わせる。しかし、この世界がスポットライト世界であるならば、われわれは、スポットライトに照らし出される出来事を見ている側にはなく、スポットライトによって照らし出される側にいるのでなければならない。スポットライトは私の人生の一断面を照らし出す。世界を見、世界について考えている私の意識の一断面を照らし出しているのである。そして、スポットライトが私の上を通過した後は、私は闇の中に消えてしまう。私はスポットライトに照らし出されている部分のさらにごく小さな一部なのである。

今は2009年である。しかし、今が2009年であることは偶然である。今が2000年の上にいることも可能だったし、B. C. 2000年の上にいることも可能だったはずだからである。今が2000年であったり、B. C. 2000年であったりしたかもしれないのである。また、無数の時間点の中で私が存在する時間だけが現在という特別なあり方をしている。多くの人々は過去か未来に存在するのに、私が現在という特別な時に存在するということは奇跡的なことである。以上のような考えも、移動する今によって誘発されたものである。

今が2000年でもありえたとは、スポットライトが2000年を照らし出していることもありえたということである。それでは、いつスポットライトが2000年を照らし出せば、今が2000年になるのだろうか。それはもちろん今である。今、スポットライトが2000年を照らし出せば、今が

2009年となるのである。そうすると、今が2009年であるとは、今スポットライトが2009年の上にいるということであるだろう。スポットライトが今の時点を表すとすれば、今スポットライトが2009年の上にいるとは、第二のスポットライトが、第一のスポットライトによって照らし出された2009地点を照らし出すということだろうか。それはいつのことだろうか。この問いは無限に繰り返されるだろう。結局、スポットライトは何の役割も果たしていない。今が2009年であるとは、今、今という時点が2009年の上にいるということではない。端的に、今2009年なのである。

私は今存在している。聖徳太子も、ソクラテスもかつては存在していたが、今は存在していない。また、私が100年早く生まれていたら、私は今このときには存在していなかっただろう。私は、聖徳太子やソクラテスを差し置いて、自分が今という特別な時に存在するという僥倖に恵まれたことを喜ぶべきだろうか。そう思うとすれば、私は、永遠の相の下に世界を一望しているのである。しかし、私は、実際は時間的存在である。そして、聖徳太子も、ソクラテスも、名もない市民も、すべての人が自分が今このときに存在していると思うだろう。私だけが特権を享受しているわけではないのである。

それでは、今が2009年であるということは世界についての事実なのだろうか。世界とは何だろうか。また、今が2009年であるとはどのようなことなのだろうか。

2009年にはさまざまな出来事が生じるだろう。2009年の出来事の集合を2009年世界と呼ぶことにしよう。2009年世界の前には2008年世界があり、2009年世界には2010年世界が続くだろう。この世界においては、このようにさまざまな世界が継起する、と言いたくなるだろう。「この世界」を全体世界と呼ぶことにしよう。2009年世界

や2008年世界は、全体世界に対する部分世界である。では、全体世界に今という特別な時点があるだろうか。たとえば、全体世界において、今2009年世界が生起しているということがありうるだろうか。ここで再びわれわれは、出来事が記述された年表の上を、今のスポットライトが順番に照らし出す、という世界像に誘い込まれる。そして、年表が全体世界であると思いつむ。しかし、これもまた誤った描像である。全体世界の部分を今がなぞって行くのではないし、全体世界の内部で部分世界が継起するのでもない。その中で、今という時点が移動したり、2008年世界や2009年世界が生起したりするような世界があるわけではないからである。また、私の生涯が私のそれぞれのステージからなるように、全体世界がそれぞれのステージからなるというわけでもない。私の生涯のさまざまな体験を通じて同一の私が存在し続けるというような意味において、全体世界が存在するわけではない。2008年世界から2009年世界への移行において、変化の基体としての世界があるわけではないからである。したがって、全体世界において、あるいは、この世界において、今2009年世界が生起していると言うことはできない。部分世界が継起する、それがすべてである。

では、今が2009年であるということは、全体世界ではなく、2009年世界における事実なのだろうか。2009年世界において今が2009年であることは確かであるが、2009年世界において今が2009年であるということはトートロジーである。2008年世界においては2008年が今であり、2010年世界においては2010年が今である。したがって、2009年世界において今2009年であることは特別なことではない。2009年世界が存在することは特別なことであり、私(T.H.)が2009年世界に存在するということが特別なことであるが、それは、B. C. 50年世界が存在することや、

B. C. 50年世界にクレオパトラが存在することが特別であるのと同じ意味においてである。

確かに今は2009年である。私は今が2009年であると信じている。それゆえ、T.H.が、今が2009年であると信じているということは事実である。また、今が2009年であると信じているT.H.が、2009年世界の一員であるということも事実である。それに加えて、今が2009年であるという更なる事実があるわけではないのである。

しかし、それにもかかわらず、時が流れるという思いを断ち切ることは難しいだろう。それは、われわれが時の流れを知覚しているからである。年の初めに、昭和はまた遠くなってしまったと感慨を抱いたり、年末に、時間の流れるのが年々早くなると嘆いたりするだけでなく、われわれは、誰もが、時の流れを直接に知覚していると思っている。たとえば、音楽を聴いてときがそうである。

私は今パーセルのオードを聴いている。私は、パーセルの音の流れを知覚している。音が流れるとは、音が次々と生じ、遠ざかって行くことであり、音の流れを知覚するとは、それぞれの音体験が遠ざかって行くことを知覚するということであるように思われる。それならば、私は、今、ソプラノを聞いた体験が過去へと遠ざかって行くのを知覚しているのである。視覚の場合は次のようなことになるだろう。電車がホームから遠ざかるのが見える。電車がホームから遠ざかるとは、電車とホームの距離が刻々と広がって行くことであるが、電車がホームから遠ざかるのが見えるとは、電車がホームに停車していた時が刻々遠ざかって行くことを知覚しているということではないだろうか。

問題は、時の流れの知覚に対応するような出来事が外界で実際に生じているか否かということである。しかし、時間知覚に関して、知覚対象と知覚体験の間に因果関係が成り立っている

かどうかを検討する前に、過去の体験が遠ざかりつつあることを知覚するとはいかなることであるのか、ということを検討しておかなければならない。持続の知覚は色の知覚や痛みの感覚とは構造が違う。赤の視覚体験や痛み体験は心的には単純である。だから、痛みを分析することはできない。痛みの分析があるとすれば機能的分析だけである。それに対して、持続の意識の解明はアウグスティヌス以来の哲学的問題である。持続の意識は高次の意識状態であり、より基本的な心的状態によって説明されなければならないと思われるからである⁵。

私は過去の出来事が遠ざかったと、確かにしばしば感じる。私は東京オリンピックが遠くなったと実感する。それは、東京オリンピックから45年が過ぎたという思いだけからくるのではない。私はメキシコオリンピックの開会式を覚えている。そして、メキシコオリンピックの開会式をテレビで見ながら、東京オリンピックから4年がたったのだと思ったことも覚えている。また、ロサンゼルスオリンピックの開幕を前にして、東京オリンピック開幕20周年を特集した雑誌を読みながら、東京オリンピックからもう20年が経つのか、と感慨にふけったことを覚えている。このようにして、ある出来事の想起には、同じ出来事を想起したことの想起がからみついていて、あの時は4年前のこととして、またあの時はもう20年も経ったのかという思いとともに思い出されたものが、今では45年も前のことなのである。こうして、過去は奥行きを獲得し、遠ざかって行ったものとして認識される。

時の流れの直接的知覚と見做される体験においても、同じようなことが生じているのだろう。Aの音にBの音が続くとき、われわれには、Aの音の次にBの音が聞こえるだけでなく、AとBがひと連なりの音として聞こえる。Bの音が聞こえるとき、Aの音は短期記憶されているの

である。さらにそれにCの音が続けば、Bが短期記憶され、Aは短期記憶の短期記憶へと移行する。しかし、それだけではない。おそらく、短期記憶の短期記憶の対象となったAの音は、同時に、先ほどは短期記憶されていたものとして、さらにその前には知覚されていたものとして現れてもいるのである。こうして、知覚されていたAが短期記憶の対象となり、さらに二重の短期記憶の対象となる様子が描き出されるのである。そこから、Aが知覚の対象から短期記憶の対象へ、そして、二重の短期記憶の対象へと変容しつつあるという感覚が生じてくるのだろう。われわれの時間意識は、知覚対象の短期記憶と直前の意識状態の短期記憶という、二種類の短期記憶によって構成されているのである。こうした意識モデルが正しいものであるとすれば、時の流れの感覚とは、意識に直接与えられたものではなく、心の構成作用の結果であるということになるだろう。時の流れを知覚しているとき、われわれは、自らの心の作用を世界に投射しているのである⁶。

今という特別な時点が存在するわけではない。また、過去も未来も存在しない。それは、マクタガートが考えたように、過去であること、現在であること、未来であることが矛盾を生み出すからではない。過去、現在、未来は、オッカムの剃刀によって切り落とされなければならないのである。しかし、一部のB論者が考えているらしいように、世界が静的なブロックであるわけではない。世界は動的である。継起的に出現する出来事の連鎖、それが世界である。

注

1 マクタガートの時間論に関しては入不二(2002)が詳しい。

- 2 B系列を時間の基本と考える立場はB理論と呼ばれる。現代の英語圏においては、数の上ではB理論のほうが優勢であるように見える。B理論を代表する著作としてMellor(1998)を挙げておく。
- 3 スポットライト説はブロード(Broad, 1923)による。ブロードは、スポットライト説を否定し、過去と現在は実在するが未来は実在しないとする成長ブロック(growing block)説を擁護している。A理論には、もうひとつ、現在の出来事のみを認める現在主義と呼ばれる立場がある。現在主義の起源は、『告白』のアウグスティヌスにまで遡ることができるが、現代における現在主義については、Zimmerman(1998, 2008)、Bourne(2006)を参照。
- 4 シューメイカー(Shoemaker, 1969)は、変化が存在しない世界でも時間が存在することが可能であると主張している。しかし、変化しないこと、あるいは、同じ状態にとどまり続けることとはいかなることであるかは明白ではない。変化が止まった世界では人は同じ姿勢を保ち続けるののだろうか、はたしてその人は止まった瞬間の精神状態のまま存在し続けるのだろうか、それとも意識が消えるのだろうか。音波は進行を止めるのだろうか。では、光や電磁波はどうだろうか。分子運動はなくなるのだろうか。沸騰したお湯の温度はどうなるのだろうか。絶対零度になるのだろうか、それとも100度のままなのだろうか。変化の存在しない世界を整合的に想像することはできないのではないかと私は思う。シューメイカーの議論が成功しているとしても、そこから引き出せるのは、変化の知覚なしに時間の経過を知ることは論理的に可能であるという、時間認識に関するテーゼだけである。
- 5 変化の知覚の問題に関して、詳しくは星野(2006)を参照されたい。
- 6 ル・ポワドヴァン(Le Poidevin, 2007)もA特性は投射された特性であると考えている。ただし、ル・ポワドヴァンの意識モデルは本稿のものとはかなり異なる。

文献表

- Bourne, C. (2006), *A Future for Presentism*, Oxford University Press.
- Broad, C. D. (2008), "The General Problem of Time and Change : An Excerpt from *Scientific Thought* (1923)", in van Inwagen and Zimmerman, eds.(2008).
- Dummett, M.(1960), "A Defense of McTaggart's Proof of the Unreality of Time", *Philosophical Review* 69.

- 星野 徹(2006)、「持続の知覚」『埼玉大学紀要』第42卷(第2号)。
- 入不二基義(2002)、『時間は実在するか』講談社現代新書。
- Le Poidevin, R. (2007), *The Images of Time*, Oxford University Press.
- McTaggart, J. McT. E. (1908), “The Unreality of Time”, in McTaggart (1996).
- (1996), *Philosophical Studies*, Thoemmes Press.
- (2008), “Time: An Excerpt From *The Nature of Existence* (1927)”, in van Inwagen and Zimmerman, eds.(2008).
- Mellor, D. H. (1998), *Real Time II*, Routledge.
- Shoemaker, S. (1969), “Time without Change”, in Shoemaker (2003).
- (2003), *Identity, Cause, and Mind*, Expanded Edition, Oxford University Press.
- Sider, T., Hawthorne, J., Zimmerman, D. W., eds. (2008), *Contemporary Debates in Metaphysics*, Blackwell Publishing.
- van Inwagen, P., Zimmerman, D. W., eds.(2008), *Metaphysics: The Big Questions*, Blackwell Publishing.
- Zimmerman, D. W., (1998), “Temporary Intrinsic and Presentism”, in van Inwagen and Zimmerman, eds.(2008).
- (2008), “The Privileged Present: Defending an “A-Theory” of Time”, in Sider, Hawthorne and Zimmerman, eds. (2008).